Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

News Letter　No.5

index

新しい区切りに向かって ……P1
世界教会協議会第十回釜山総会 報告　前篇 ……P3
世界教会協議会第十回釜山総会 報告　後篇 ……P7
詩篇133篇の喜び ……P15
原発の課題と私たち ……P16
教会直接支援の終了にあたって ……P17

新しい区切りに向かって

1. 発足から今まで

東北ヘルプは、2011 年 3 月 18 日に生まれました。その正式名称は「仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク」であり、誕生の場所は「日本基督教団東北教区センター」でした。組織的には、「仙台キリスト教連合」の中に位置づけられることとなりました。

発足当初、代表は吉田隆師（日本基督改革派仙台教会牧師・仙台キリスト教連合代表）、義援金担当は秋山善久師（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・仙台キリスト教連合総務）、財務担当は田中武司氏（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会会員・税理士）、監事は菊地茂氏（純福音仙台教会会員・行政書士）、そして事務局は川上直哉（日本基督教団仙台市民教会主任担任教師）と阿部頌栄師（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師）が担うこととなりました。このメンバーは、一人も欠けることなく今に至っています。このことは本当に幸いなことと思います。

発足後すぐ、他団体との連携の中で理事会体制が整えられ、法人化および食品放射能計測所の設置が進みました。法人監事に小西望師（日本基督教団仙台北教会主任担任教師）、顧問に長嶋清氏（日本基督教団西那須野教会会員・元アジア学院職員）とクラウディア師（ＵＭＣ派遣宣教師）、食品放射能計測所の所長に保科隆師（日本基督教団仙台東一番丁教会主任担任教師）と明石義信師（日本基督団常磐教会主任担任教師）、郡山計測所分室長に木田恵嗣師（ミッション東北郡山キリスト福音教会牧師）、仙台計測所チャプレンとして中野正義師（保守バプテスト同盟泉聖書バプテスト教会牧師）、姉妹教会プロジェクト担当として趙泳相師（石巻おちゃっこハウスチャプレン）、そして法人理事に井形英絵師（日本バプテスト連盟南光台キリスト教会牧師）や中澤竜生師（基督聖協団西仙台教会牧師）が加わってくださり、今の体制が整います。

東北ヘルプが、組織として仙台キリスト教連合を上部団体に持ったことは、被災支援という事柄の新しい可能性を拓くことに寄与しました。被災現場における諸宗教の協働という可能性です。仙台キリスト教連合は「社団法人 仙台仏教会」とのカウンターパートナーとなり得ると目されました。また、仙台キリスト教連合は日本基督教団東北教区仙塩地区（現在の宮城中地区）牧師会を母体としており、その出自は宮城県宗教法人連絡協議会との接続に有効な機能を発揮しました。そうして、諸宗教者の協働組織「心の相談室」が、医療者・学者等と共同が設立され、その働きは現在まで継続発展しています。

東北ヘルプは、２０１１年３月当初１カ月の予定で始まりました。しかしその期間は延長されていきます。３ヶ月延長し、１年に延長した頃、一つの目標が掲げられました。その目標とは、2013 年秋に行われる世界教会協議会（ＷＣＣ）釜山総会で、世界に感謝を申し上げること、でした。

この目標を立てたころ、それはあまりにも過大な目標に見えました。しかし今、気づいてみれば、その目標は過去の事柄となりました。今、2014 年を迎えています。新しい区切りが、おぼろげに、見えてきています。

2. 2014年の展望

新しい区切りとはなんでしょうか。それはおそらく、2014 年中にはっきり見えてくるように思います。それはおそらく、「福島」第一原発事故の影響の顕在化（あるいは杞憂に過ぎなかったことの判明）と共に、見えてくることでしょう。

2014 年 4 月から、「福島」県による「県民健康管理調査」の「本格調査」が、被曝 8 町村および「福島」市・郡山市を中心に、始められます。低レベル放射線の影響は顕在化までに時間がかかると言われ、また、その影響は「無い」とも言われます。その議論の一応の結論が、今年中に出てくるでしょう。それはおそらく、私たちの新しい区切りを示すものとなると思います。

そして同時に、震災後の日常に展開する教会の働きをお支えし、南北 500 キロの沿岸地域で被災された方々の「孤立と不安」に寄り添い伴走させていただくことが、東北ヘルプのミッションとなります。東北ヘルプにとってのこの一年は、自らのミッションに忠実に従事しつつ、新しい区切りをはっきりと見つけ出して行く、そうした大切な時となるでしょう。

3. 私たちの現場

ＷＣＣを目指し、それを通過した東北ヘルプは、今、国内外の広範なネットワークの中に組み込んでいただくことになりました。一地方の、比較的小規模な教会ネットワークに過ぎない仙台キリスト教連合が、皆様の祈りと支えによって、働きの場を世界大に広げました。それは喜ばしいこと、栄誉なこと、感謝なことです。しかし、東北ヘルプはその設立当初と変わらず、「現場」を大切にし、「現場」に聴いて、「現場」に踏みとどまり続けようと思います。なぜなら、不安と孤立に脅かされている人々の呻吟の声に、聖書の神様の声が聞こえるはずだからです。現場に立つ時、私たちは、自分たちの小ささを用いてくださる神さまにお会いすることになる。それは聖書に繰り返し語られた事柄でした。東北ヘルプは、その事実に立ちたいと思います。

そのことを確認し直した会議が、昨年末、行われました。南三陸および気仙沼市本吉町の支援を話し合っていた時のことです。気仙沼市本吉町では、障碍児とその母親の支援が、ＷＣＲＰ様や日本国際飢餓対策機構様と共同で、展開しています。その担当者である秋山師が、支援の原則をこう語りました。

「被災地では、健常者・男性・壮健な者が中心になって、復興が進められる。しかしそれでは何かが間違えてしまうのではないか。強い人を中心に進めるのではなくて、強くない人を中心にすることで、本当の可能性が生まれるのではないか。ここに障碍児がいる。この子どもたちを中心に置いて考えてみたい。この子どもたちへのケアが、コミュニティを作って行く。コミュニティが、経済を回して行く。回る経済が、地域を支えるようになる。そういう順番が在り得るのではないか。そういう新しい復興のかたちを、気仙沼の本吉から始めてみたい。」

強くない人を中心に、現場を真ん中に持ってきて、全てを組み立てること――この原則は、「福島」の被曝地を巡る巨大で深刻な課題においても、また、諸宗教間の協働という新しい局面においても、そして幅広い国際的な連帯においても、まったく変わることが無いように思います。そしてそれは、どんな場合でも、変えてはならない原則であると思います。

4. 新しい区切りに向かって

東北ヘルプは、国際的な連帯への応答として、フィリピン支援のための募金も、お預かりすることに致しました。そして２０１４年１月末、フィリピンで、支援団体の連絡会議が行われることになりました。長嶋顧問がその立ち上げの現場に参加し、東北ヘルプがお預かりした募金から、集結する全ての団体の交通費を担わせていただくこととなりました。これは、東北の震災の中で学んだ知見の活用です。こうして、「教会にできることがある」ことを、私たちはまた、新しく知らされています。

東北ヘルプは、2011 年 3 月 18 日以来、「教会にできることがある」ことを、新しく発見し続けています。おぼろげにだけ見える新しい区切りは、この新しい発見の中にその輪郭を明らかにすることでしょう。ここに新しい年の御挨拶を申し上げ、一層の祈りとご支援をと、お願い申し上げる次第です。

～東北ヘルプ第四年目を迎える記念会のお知らせ～

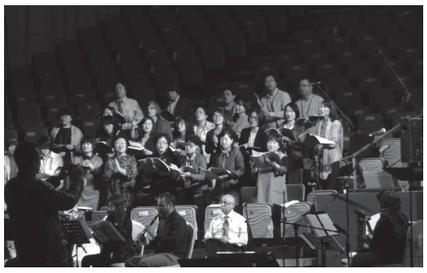
【日時】2014年3月18日（火）午後6時から(予定)
【場所】東北教区センター・エマオ３階
【内容】基調講演（吉田隆・東北ヘルプ代表）
パネルディスカッション（東北ヘルプ理事）
事務局報告と茶話会

世界教会協議会第十回釜山総会 報告 前篇

2013年10月30日から11月8日まで、韓国釜山において、世界教会協議会（WCC）第十回総会が開催された。世界中の教会から825名の代議員が出席し、その他参加者は3500名を数えた。この「その他参加者」として、東北震災への支援の感謝と「福島」の放射能禍の悟を世界に発信するべく、東北ヘルプは、牧師・画家・通訳者・ムスリム指導者等からなる8名のチームを編成し、参加した。以下、前後篇に分けて、その報告を記す。

（2013年12月18日　東北ヘルプ事務局長　川上直哉　記）

WCC総会は、毎朝礼拝に始まり、毎夕礼拝で締め括られました。そこには多様な礼拝のコラボレーションがありました。



この日、舞台左には若者たちが、右には正教の聖職者が並び、共に礼拝を形作りました。舞台の左隣には、楽団と合唱隊が配置されていました。

2013年10月30日水曜日から、WCC釜山大会は、開催されました。大会は、朝夕の礼拝によって枠づけられていました。数多くの色とりどりの礼拝が、共に守られる。その様子は、参加するすべての人に、平和と一致を思い出させる光景となります。

東北ヘルプは、ニュージーランド・クライストチャーチの諸教会と共に、「災害時における教会の役割」を議論する場として、ブースを設営することとなりました。東北ヘルプの井形理事、李職員、そして私と共に、渡辺総一画伯ご夫妻とが、ニュージーランドのジル・ホーキーさんと、開会初日から、ブースを設置しました。私たちのブースは角地で、釜山市のツアーデスクの目の前、人が程よく通り、人はゆっくりとそこに留まれる、格好の場所でした。そこで私たちは、「福島」の映像を中心に資料を示しつつ、渡辺先生の絵画が常設され、大きな存在

ブース会場となった「マダン・ホール」

感を発しています。（英語・韓国語の映像は http://p.tl/V-hP にあります。日本語の映像は http://xfs.jp/iQAWI から、ダウンロードいただけます。広くシェアし、祈っていただければと、願っています）

現場では、あるはずの壁・椅子・モニターがない、という不思議な状況で始まりました。しかし、感謝と熱意を以て事柄にあたりますと、よい結果に導かれます。これまで頂いた様々な「訓練」が、ここに、活かされました。

私たちの一つの焦点は、代議員のの評決を求める本会議において、核発電の問題を議論してもらうことでした。それは、WCC に新しい展開をもたらすことであり、また、アジア・太平洋の連帯を生み出す触媒を作り出すことでもあるはずです。

WCC は、1954 年の米国大会において、日本からの代議員の尽力に刺激され、核兵器反対の声明を出しています。しかし、核発電（原発）については、まだ、総会レベルで議論されたことがありませんでした。

転換を求めるきっかけは、やはり、「福島」にありました。

ブースでは「福島」を世界に伝えました。

2011 年秋のことです。「福島」の事故を受けて、ジャマイカで、「正義と平和」をテーマとした WCC 大会準備会議がありました。準備委員の大きな努力の末、例外的措置として、この会議の中で「福島」の問題を取り上げることになりました。しかしその結果、WCC はこの問題を取り扱うに及ばない、という結論が、そこで出されてしまったのです。この危機的状況が、しかし、関心を持って下さった方々の心に強い火をともしました。世界中で、WCC 本会議で「福島」を取り扱うのだと、強い意見が出されました。それは 2012 年 12 月に会津で行われた国際会議に結実し（12 ページをご覧ください）、そして、今回の WCC へ進んだのです。

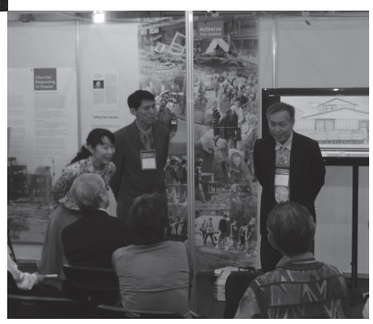
総会最後、ブースでともに過ごした仲間の集合写真

しかし、状況は厳しいままでした。ジャマイカでの失地は大きかったのです。私たち東北ヘルプも、世界の方々と共に、できることを鋭意努力し続けました。結果、2013 年秋に至るまで、韓国・台湾・ニュージーランドとの協働が成立し、インドネシア・フィリピンの理解と協力を得るなど、広範囲なロビー活動を行うことができました。

そして WCC は開幕しました。日本基督教団からの代議員・伊藤瑞男牧師は、本会議最初のフロアからの発言者として、「福島」を訴えました。その speack out を皮切りに、各会議で、本当に五月雨に、「福島」が語られました。ご協力くださった世界中の先生方に、お礼の言葉が追いつきません。私たちのブースにも、多くの人が立ち寄り、話を聞いてくださいました。渡辺先生の絵画が、本当に多くの人々の目を惹きつけてくださいました。そして、ニュージーランドや、台湾長老教会、そして木田恵嗣牧師（「福島」県キリスト教連絡会代表）等の発題を行う「アドボカシー・フォーラム」が、私たちのブースで、連日、行われました。

そして、11 月 1 日金曜日、一つの「嘆願書」が完成しました（資料集 1 ページをご覧ください）。世界各国か

ブースでは「被爆者と連帯するアドボカシー・フォーラム」が開催され、日本・台湾・韓国・ニュージーランドそしてイスラムからの発題がありました。



上は、ニュージーランドからの発題の様子。右は、台湾からの発題の様子。両国の教会はそれぞれ、「核から解放された世界」を目指して、息長く取り組みを続けてこられたのでした。

ら 32 教団教派、85 名の代議員が、名前を連ねてくださいました。「「福島」の問題に学び核のない世界を生み出さなければならない」という声明を出そうという、請願書でした。その署名活動に、どれだけ多くのお力が添えられたことでしょう。（別紙資料集１ページをご覧ください）

本会議場では、その請願書の審議が行われました。同様の声明を求める請願は、20 件も、提出されたそうです（私は、その時、台湾のプレゼンテーションをブースで行うために、本会議場にはいませんでした）その中で、実に、私たちの請願書は、審議を通過し、承認されたのです！大きなよろこびの知らせが、私たちの中に交歓されたのでした。

東北ヘルプの井形牧師は、この報告を受けた後、日本に戻りました。代わって、デービット・マッキントッシュさんとナセル永野さんが、私たちのパーティーに加わってくださいました。マッキントッシュさんは、在日大韓基督教会の人々と共に生きた宣教師のご子息、ナセルさんは将来を嘱望された若き日本人ムスリムです。

WCC の期間中の土曜日、古里原発へと向う旅行の企画企画が、WCC 準備委員会によって用意されていました。旅行といっても、釜山市内から 20 キロ未満の地にある原発への、「近すぎる」旅行です。私たちは、その原発立地場所で、平和行進をし、原発ゲート前で礼拝をしました。川上も、英語で、10 分程度の証言と賛美をしました。原稿なしでの英語スピーチは、初めての経験でした。素晴らしい通訳者（張允載・梨花女子大教授）に支えられて、それは新鮮な感慨を与えるものとなった、そうです。神様の恵みと、英語のコーチをしてくれた南三陸のディアス宣教師に、ただ感謝をしています。

11 月 8 日、大会は、10 日間の審議を終えました。結局、私たちの声明文は採決するに至らず、総会は中央委員会へとこの審議を付託することを決めました。つまり、これから、声明文の作成と採択の可否をめぐる議論が始まります。私たちの旅路はまだ続くのです。

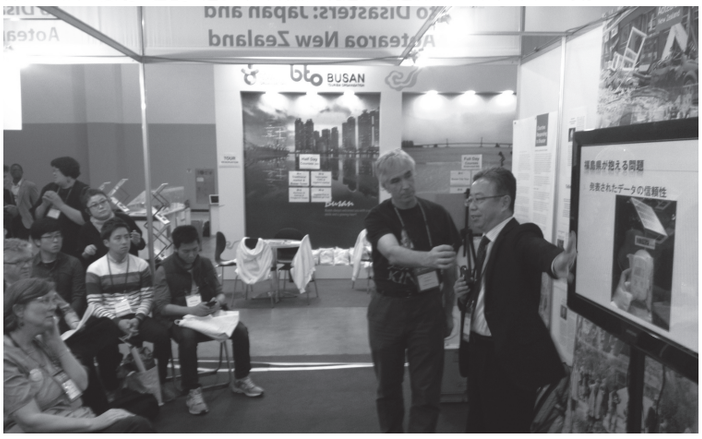
ここまで、私たちは、本当に大きな学びを得ることができました。

まず、私たちと協働してくださるニュージーランドからは、40 年前に始まり 20 年前に勝利し、この 20 年間それを保持してきた、「原発から解放された国 (Nuclear-Free Country) への運動」の報告をいただきました。ニュージーランドも、40 年前までは、「英国について行く」を国是とする、日本と似た国であったそうです。しかし、草の根の運動と政府レベルの活動とを繋ぎ合わせる努力は、その状況を転換させた、というのです。そしてそれは持続している。それは、大きな励ましとなりました。

同時に、ニュージーランドの報告は、南太平洋が核の実験場になってきた現実を、私たちに思い出させました。「福島」の現実は、すでに 40 年前から南太平洋で起こってきた事柄の延長線上に過ぎない。そのことを、私たちは、南太平洋からブースにやってくる多くの方々との語らいの中で、思い知らされたのでした。

そして、アジアには、「福島」の問題が霞むほど、数多くの深刻な問題が山積している。そのことも、はっき

日本からは、「「福島」の証言」と題して、木田牧師が発題した。通訳はD・マッキントッシュ氏。



とりわけ、この発題には、非常にたくさんの参加者がありました。

りと知らされました。人身売買、移住生活者の奴隷労働、日常的なレイプ、大規模廃棄物汚染、宗教的迫害、厳しい貧困状況下での自然災害、内戦と亡命による難民、その他、その他。大会会場には、そうした事柄を訴えるブースが、まるで博覧会のように、林立していました。そうした悲劇の訴えを、「福島」の訴えが、阻害する危険性はないか。私たちは真剣に考えさせられました。

川上は、今回、「正義と平和」を議論するための「エキュメニカル・カンヴァセーション」と呼ばれる催事に参加しました。そこでは、「正義」と「平和」と「正しい平和」という三つの言葉をめぐって、真剣な神学的討論が展開していました。この討論は、平和運動や人権運動を行うために、決定的な議論である。川上はそう理解し、その議論に寄与するべく努めました。

もし、私たちの「福島」をめぐる世界への運動が、私たちに留まる“だけ”のものであったり、私たちを中心に展開する“だけ”のものに留まるなら、早晩、それは霧散するでしょう。アジアには「もっと深刻な」問題がある、という声に、どうして、抗えるでしょう。被害者が互いに足を引っ張り合うようではいけない。そうではない言葉が必要だ。他の問題を自分の問題とできる、自分の問題を他の問題の中に見出していただける、そういう言葉が、必要だ。それがないから、私たちは負けるのだ。そう思って、議論に参加したのでした。

今回、「福島」の問題は、移住労働者の問題と、米軍基地の問題と並んで、アジア太平洋の連帯を生み出す触媒となるものと知りました。しかし、そのためには、これまでの運動論を越えなければならない。つまり、「個人の権利獲得」の次元で展開してきたのがこれまでの運動論ですが、それを超えて、「支えあう自立の獲得」へと進むこと。これは、阪神淡路大震災の中で見出された支援の理論であったことを、最近、私たちは「出会う会」という試みの中で知らされています。それはつまり、新しい運動論においては、「包括的であること」と「寛容であること」を鍵語として、教会や寺院などの宗教施設・団体が活用される方向へと展開するはずだと、私はそう理解しています。

以上、世界教会協議会第十回釜山総会の報告の前篇を記しました。

（2013 年 11 月 18 日　川上直哉　記）

古里原発の安全性をアピールする建物から、ピースウォーク開始。

参加者の中には、「原発を問うピースウォークをするのでしょうか？」という声も。企画者からは、「敵を知り己を知れば百戦危うからず」と、孫子の言葉が。

原発正門前で。「福島」を比較対象として「地盤の安全性」をアピールする施設を前に、「福島」の事故の大部分は「人的要因」によるものだったと、川上のスピーチ。通訳の張允載師と共に。帰路、東京新聞記者の取材を受ける。

Jericho Walk!
with Hibakusha

Asian and Pacific Christian Solidarity for a World without Nukes
ὅτι ἀγάπη καλύψει πλῆθος ἁμαρτιῶν——1Peter 4:8
Coordinated by Touhoku HELP

Advocacy Forum of Solidarity with Hibakusha
30th Oct.– 7th Nov, 13:10- / At Madang Booth of A-NZ and Japan

Wed 30th 13:10-14:00 "The Situation of Taiwan."
Thur 31st 13:10-14:00 "A-NZ, a Road to the Country without Nukes."
Fri 1st 13:10-14:00 "Indictment against the Nuke Makers:
A challenge from Japan to the world with solidarity."
(Saturday, 2th Nov.: "Peace Walk to Jeri-Kori")
Mon 4th 13:10-14:00 "A Testimony from Fukushima."
Tue 5th 13:10-14:00 "A Testimony from Korean Hibakusha"
Wed 6th 13:10-19:45 The World Hibakusha Exhibition "Hibakushaten"
Thur 7th 13:10-14:00 "A Christian and Muslim Dialogue about Fukushima."

Morning and Evening Gathering for Prayer
30th Oct. – 8th Nov, 8:30-9:00 / 20:00-20:30
At Madang Booth of A-NZ and Japan

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network (Touhoku HELP, Japan)
The Inter-Church Forum of A-NZ (Christchurch, Aotearoa New Zealand)
Korean Christian Solidarity for a World without Nuclear (Republic of Korea)
The Presbyterian Church in Taiwan (PCT, Tawan)
No Nukes Asia Actions (NNAA, Japan)
NPO No More Hibakusha (Japan)

ブースで行われたフォーラムを告知するポスター。ポスターの左側には、渡辺総一画伯の絵画を使用させていただきました。

世界教会協議会第十回釜山総会 報告 後篇

WCC 総会の会場となった、釜山 BEXCO コンベンションホール

ＷＣＣ釜山総会　報告（下）

1. 初めに

WCC 総会は、いくつかの意味で、被災地にとって有益でした。

第一に、日本の地震・津波・原発爆発事故という「三重の災害」について、世界に思い出していただくことができたということです。

第二に、東北の震災以後も世界では悲劇が続く、その中で、私たちはどのように連帯したらよいのか、学ぶことができたということです。

第三に、WCC にもある限界性を見つめ、その克服を目指す世界教会の運動に、私たちも参画することができる―それも、私たちの課題に取り組むことで、参画することができる―という励ましを得たことです。

以下、写真と資料を用いながら、上記の三点をご説明いたします。

特に今回は、韓国での新聞報道を日本語訳した資料集を用いて、ご説明を「わかりやすく」してみたい、と思います。

2. アジアと正義と平和

今回の大会で大切にされていたのは、「エキュメニカル・カンヴァセーション」というプログラムでした。その様子は、資料集４ページの国民日報の記事に詳しく説明されています。私は、「正しい平和（Just Peace)」を主題としたエキュメニカル･カンヴァセーションに参加しました。

このプログラムと、全体会（プレナリー＝ plenary と呼ばれていました）の両方に参加して、私は多くの学びを得ました。それは､｢福島｣を考えるために必要な学びでした。

アジア全体会という会合が持たれました。そこでは､「いのちの神よ、私たちを正義と平和へ」という今回の WCC 総会の標語を巡って､厳しい議論が持たれていました。「正義と平和（Justice and Peace)」が、重要な言葉として議論されていました。

アジアには、無数の悲劇が起こっています。人身売買、そのための誘拐、巨大規模の環境破壊、民族と宗教に基づく紛争、移住労働者への差別と偏見、女性の性労働、それらの背景にある政治的腐敗・・・。そうした事柄は、例えば「正義を巡る全体会（プレナリー)」で、影像を用いて、生々しく報告されていました。

この写真の時、インドからの報告者は、公害のために体が「くっついて」生まれてきた赤ちゃんへの支援の報告をしていました。無理な開発は、最も小さな命を脅かす。それは、原子力発電所の問題を連想させる報告でした。今、この子供は、困難な手術を経て、無事に「切り離された」そうです。その報告がなされた時、会場には拍手が鳴り渡りました。

実際、アジアには、無数の問題がある。それは、ひとつの「正義」で片付けられるものではない。そのことを表現する為でしょう。幾つもの全体会では、各国の若者たちが多様な衣装を身にまとい､様々な言語で「平和」や「正義」をプラカードに書いて登場しました。

今、一つの印象深い発言を思い出します。アジア全体会では、はっきりとこう語る人がいました――「Just Peace ＝正しい平和」のために！という言葉遣いで、アジアでは、どれだけ多くの人々が酷い目に遭ってきたことだろう｡そのことを考えると､｢Just Peace｣という言葉は、アジアでは使えない。アジアは多様性に溢れている。我々は様々な「Justice」と様々な「Peace」が共存している中を生きている。使われるべき言葉は、「Just Peace」ではなく、「Jusitice and Peace」であるべきなのだ！

3. 語り出すこと=Speak Out！

こうした議論のなかで、「フクシマ」を語り出すこと。他の問題に埋もれてしまわないように、そして、他の問題と連帯するように、注意深く、しかしはっきりと、「フクシマ」を speak　out ！すること。それが、私たちの課題でした。ブースでは、確かに、それが毎日なされました。そしてそのことは、韓国の新聞（一般紙）でも、取り上げられたのでした（資料集 3 ページ)。

全大会やエキュメニカル・カンヴァセーションでも、それは､なされなければならない。参加した私たちの課題は、そこに絞り込まれました。

そして、私たちは Speak Out ！をはじめます。

まず、東北ヘルプの井形英絵理事が、「アジア全体会（プレナリー)」で、全アジアの代表者の前に立ち、発言しました。その内容は、主に三つ。震災の時に送ってくださった祈りと支えへの感謝と、海洋汚染についてのお詫びと、「福島」を覚えて祈ってほしいという要請、でした。「エキュメニカル」と語られる一方で、しかし、アジアは搾取の庭になっている現実がある。エキュメニカルの内実がいま問われている――そうしたことを、フィリピンの方が発言した後でした。井形理事は、日本政府だけでなく世界もまた、被曝の現実を覆い隠そうとしている。私たちを助けてほしい。フクシマの課題を共に歩んでほしい。フクシマのことも日本だけでは解決できず、皆さんの助けが必要だ、と、そう繋いでくださったのです。

WCC 会場では、エキュメニカル・カンヴァセーションやプレナリー（全体会）の他に、「ワークショップ」も開催されました。「従軍慰安婦」「基地問題」「被曝」の三つのテーマに、東北ヘルプは参加しました。「従軍慰安婦」のワークショップには、川上が「男性日本人」として参席しました。そして､｢基地問題｣と｢被曝｣のワークショップには、日本キリスト教協議会や「宗教者九条の和」の皆様が中心的に関わり、東北ヘルプもそのお手伝いをいたしました。特に､FCC 代表の木田牧師は､｢被曝｣をテーマとしたワークショップに、発題者として、登壇しました。

木田牧師は、11 月 4 日に釜山においでになり、幾つもの御登壇を果たされました。上記のワークショップに加え、東北ヘルプとニュージーランド共同ブースでの「アドヴォカシ―・フォーラム」、そして月曜日夜に行われた「キャンドルナイト」でも、登壇をされたのでした。

4. 問題の多様性と、それでも求められる統合

WCC で学んだ事柄の一つは、「多様性」と「統合」の問題です。

被災地は、未だに「復興半ば」です。地域によって、復興の足取りは全く異なっています。しかし、世間はどんどん進んでゆく。オリンピック開催地も決まり、「特定秘密保護法」の喧騒も気になります。そして、フィリピンでは新たに巨大な水の害が起こった。そんな中で、岩手の復興の遅れが気になりながら、しかし、「福島」の問題が不気味にくすぶっている。

一つの課題に取り組めば、おのずと、他の課題がおろそかになる。しかし、慌てて全体を一つに統合するような計画を建てれば、必ず、無数に展開する問題の多様性が押しつぶされ、結局、弱いところ・遠いところ・小さいところへと、矛盾の皺寄せが吹き溜まる。

では、どうしたらよいのでしょうか。

川上は、4 回連続して行われた「正しい平和を巡るエキュメニカル・カンヴァセーション」に参加し、上記の問へのヒントを頂きました。WCC は広く意見を求めておられましたから、川上は、初回の参加後、英文で、自らの考えをまとめて投稿しました。多くの方々の協力を得て、それはＷＣＣへと届き、後に続くエキュメニカル・カンヴァセーションで紹介されました。以下に、その投稿した文章の日本語訳を記します。

エキュメニカル・カンヴァセーションの様子。

「正義」をテーマにした全大会。画面には「くっついて」生まれた赤ちゃんの写真。

親愛なる兄弟姉妹の皆様

この土曜日のプログラムと日曜日の礼拝を通して、素晴らしいご経験をなさったこととでしょう。心から、お慶び申し上げます。

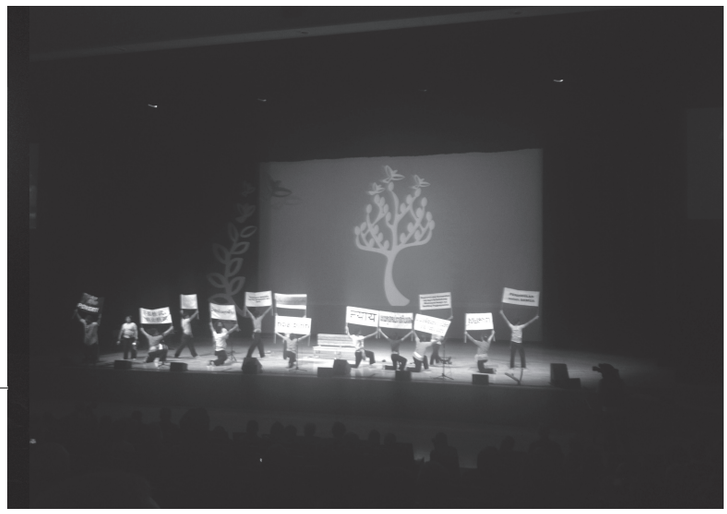
この週末の間、私は、先週金曜日のことを思い出していました。金曜日に行われたエキュメニカル・カンヴァセーションは、本当に刺激的な話し合いの時でした。

特に、それぞれの教会の具体的な活動の中で「正しい平和」というテーマが考察されて行かなければならないと、そう語られたことを思い出しています。それはエキュメニカル・カンヴァセーションに参加した多くの方々の口から出た言葉でした。そのことに、私はとても励まされたのです。ベンジャミン・ディスレーリがこう言ったことを思い出します。「正義は、行動の中にあるとき、初めて真実である！」

また、米国においては 30 年以上もの間「正しい平和」という言葉の意味を議論し続けてこられたことを知らされましたことは、私にとって、とても意味深いことでした。このことは、私たちのエキュメニカル・カンヴァセーションが終わったその場で、米国合同教会の代議員から教えて頂いたことです。

また併せて、この金曜日の印象深い思い出として、「ア

アジア地域会合。井形理事はここでspeak out! しました。



正義をテーマにした全大会。各国語で「正義」を書いたプラカードを掲げる若者たち。

ジア全体会」があったことを、申し添えなければなりません。そこで私たちは、アジアの問題が如何に多様であるかを、確認したのでした。そこではこう語られていました。「“ 正しい平和 ” という言葉を、私たちは使うべきではないと思う。そうではなくて、“ 正義と平和 ” という言葉をこそ、私たちは使うべきだ。」このことを思い出しながら、私は思索を深めています。

勿論、アジアの多様性は重要です。しかし、まさにそうだからこそ、私たちは一つに繋がって行かなければなりません。一つ一つの問題は、等しく重要で緊急のものです。しかし、一度にできることには限りがあります。ひとつひとつ、やっていかなければならない。しかしどうやって優先順位を決めることができるでしょうか？この問いへの答を求めて、「正しい平和」という言葉の適切な意味を考える必要に、私たちは迫られているのではないかと考えたのです。

「多様性を保持しつつ、“ 正しい平和 ” ということを考えること」。この課題のための適切な事例として、「福島」の事例が挙げられます。

「福島」第一原発の爆発事故のために、20 万人に及ぶ人々が強制的に避難させられました。この 20 万の人々は、今、多くの次元で分断されています。そこに現れる問題は、まさに、多様なものです。人々の苦しみに寄り添えば寄り添うほど、私たちは困難に直面します。なぜなら、その苦しみは本当に多種多様だからです。ある人の権利を守ろうとすると、別の人の権利を阻害するかもしれない。それが「福島」の現実です。

ですから私たちは、「福島」において、まず求められる者は連帯であると考えています。連帯を生み出した後、権利の擁護のために、苦しみに伴走すること。この順序が大事だと思うのです。

このことは、アジアの多様な苦しみにおいても、当てはまるのではないでしょうか。つまり、まず先に連帯が生み出され、その後に、解決が起こる。この順番が大事であると、私はそう確信しているのです。

こうした省察を踏まえて、一つの決定的な理解にたどり着いたように思います。それはつまり、「正義はいつも喫緊の課題である。そして、平和はいつも、私たちの憧れの的である」ということです。

事態を単純化する過ちに、いつも警戒するべきだと思います。私たちは、多様な人々・多様な状況・多様な文化の真っただ中に、生きているのです。ですから、たとえば「正義」ということについても、その意味を単一化して決めつけてしまうことは、本来的に言って、不可能なことでしょう。

しかし、私たちはただ、「正義」を「不正義への抵抗の言葉」として把握することができるのだと思います。「不正義への抵抗」としての「正義」です。その意味で捉えられる「正義」は、一つの特徴を持っています。それはつまり、常に喫緊の課題である、ということです。それは常に具体的な問題であり、いかなる時も決して抽象的な事柄ではない。

エキュメニカル・カンヴァセーションの最初のセッショ

太平洋の軍事基地を主題とした「マダン・ワークショップ」。

ンで、コンザット・ライザーさんが「シャローム」という言葉の深い意味を語ってくださっていました。そのお話を聞く中で、私は、ニュージーランドが「核から解放された国」を創り出してきた道のりを、思い出していました。

私たちはこの総会で、ニュージーランドと共同のブース展示を行っています。その中で知らされたことですが、40 年前、ニュージーランドの人々は、「核から解放された国」を創ろうという運動を始め、成功させたとのことです。私は、その成功の秘密は何であるかと訊ねました。答えは、「平和への憧れだ」とのことでした。「核から解放された国」として具体的に望見される平和への憧れ。その憧れによって、運動は成功したのだ、というのです。

つまりこういうことなのではないでしょうか。私たちは「正しい平和」という言葉を使うべきである。しかしそれは、多様性が確保された上でのみ、使うべきである。多様性を確保した上で「正しい平和」ということを語る。それはどのようにしてなされるのか。それは、「不正義に抵抗する運動」の内に秘められた平和を見つめ、それを自分の憧れとして胸に抱くことによって、成し遂げられる。――これが、私の現在の結論なのです。

以上のように、エキュメニカル・カンヴァセーションは、私にとってとても意味深いものとなりました。とりわけ、「福島」の課題の複雑さに悩まされている私たちにとって、この学びはとても大切なものとなりました。改めて感謝を表明いたします。

明日のエキュメニカル・カンヴァセーションにも、大きな期待を抱いて参加したいと思います。

Best regard in Christ,
Rev. Dr. Naoya Kawakami
Gen. Sec. of Touhoku HELP
touhokuhelp.com

5.「平和を巡る全体会」と小さな灯

「毎回、WCC 総会には、忘れがたい出来事が起こるのだ」と、ある方から聞きました。

たとえば、初めてアフリカで WCC 総会が行われた時、開会礼拝で、靴を脱ぐことが求められたそうです。そして説教者がこう語る。「ここアフリカの大地は、ながらく、繰り返し、アフリカ以外の人々によって、土足で踏み荒らされてきた。今、ここで私たちは靴を脱ぎ、アフリカの大地への敬意を示し、新しい出発を誓わなければならない。」

そうした「出来事」が、ここ釜山でも、起こらなければならない。それは、かならず「福島」との連帯の中で、起こらなければならない。――そのように、韓国の敬愛する兄弟姉妹の皆様が、そして世界中の主にある家族が、私たちを励まし続けてくださいました。そのエールは、昨年 12 月の会津に一つ実りをもたらしました。それが、「原子力に関する宗教者国際会議」でした。東北ヘルプも、そこに積極的に関わりました。それは素晴らしい思い出です。（その行き届いた報告は、http://p.tl/q92K をご参照ください）

この会津の会議において、大きな感動を呼んだのは、張允載（ジャン・インジェ）師の講演でした。それは「Exodus to a Nuclear Free World ＝核から解放された世界への脱出／出エジプト」と題されたものでした。（http://p.tl/go2z から、日本語翻訳付で、ご高覧頂けます）

この張先生の講演の内容が、WCC へと引き継がれていきました。私たち東北ヘルプは、韓国 NCC と何度も会議を持ち、この張先生の講演が WCC 釜山総会の最終盤に S 行われることを共に確認し、その講演をゴールとして、核の問題を提起する声を、今回の WCC 釜山総会中、あちこちで響かせよう、と語り合いました。その私たちの思いに、台湾やニュージーランドをはじめとする多くの国々が、協力してくださったのです。

そして、前回報告した通り、本会議内では「核問題を取り扱う声明文」を求める嘆願が採択されました。

そして、「朝鮮半島の平和と再統一を求める声明文」は、その末尾に次のように記したまま、採択されることになります。

d) 第 10 回 WCC 総会は、「核から解放された世界」を打ち建てるステップとして、北東アジアにおける全ての核兵器と核発電所を、完全に、実証可能な形で、不可逆的に、廃棄して行く、と確認する。。今、世界のあらゆる場所において核兵器が人道的にゆるされないものであるとする国際的合意が形成されつつある。我々の歩みは、この形成途上の運動に参与するものでもある。以上のことは、地球のどこにおいてであれ、核の危機によって、これ以上いのちが脅かされることがあってはならない、という理由に基づいて展開している運動である。

そして、「核から解放された世界に向かう声明」が、審議未了のために中央委員会に付託されたことも、前回報告した通りです。そのことが決定される際、大きな地響きのような苛立ちの声が、会場を揺らしました。その背景には、張師が講師を務めた全体会の「出来事」があったのです。

張師の講演の様子は、張允載師のインタビューを交えて、報道されました（資料集 5 ページを参照）。また、私はその様子を、以下のようにメールにして日本の方々に配信しました。

「平和を巡る全体会議」では、リベリアのノーベル賞受賞者である女性活動家と共に、韓国の梨花女子大学教授・張允載牧師のプレゼンテーションがありました。張先生は、リベリアの力強い映像を用いたプレゼンテーションの後、ゆっくり、朝鮮半島の困難から議論を始めました。

そして、世界に核の危険が急速に広がっていること、それは私たちの生活と密接につながっていることを、語り出します。そして彼は、「核の世界からのエクソダス（脱出／出エジプト）」を、語り始めました。それは、昨年12月の会津で放射能問題を巡り行われた、宗教者国際会議において彼が発表し、仏教徒の方々にも大きな感銘を与えた主張でした。

「平和を巡る全体会」の司会は、南アフリカ聖公会司教が担っていました。舞台には、丸いテーブルが置かれ、そのテーブルに、南ア・リベリア・韓国の三人の大人が座り、静かに話をする。その背後に、若者がたくさん、座って聞いている。そんな演出になっていました。

張先生の静かな語り口が次第に熱を帯び始めたとき、司会者が遮りました。平和の話をしていたのに、脱核の話になる。それでいいのかなと、張先生の熱を冷ますように水を差しました。

それからもう一度、リベリアの方の力強い話が挿入されて、そしてまた張先生が、自分たちの生活のことを静かに話し始めました。

わたしたちの外側を明るくすればするほど、実は、私たちの内側は、暗くなってくるのではないか。

拍手が起こります。
そして、スクリーンの映像が消されました。
客席もステージも、徐々に全ての電気が消されました。
そして、テーブルに置かれていた蝋燭に、
小さな灯がともされる。

張先生は、柔らかく、でもはっきり、心の中の灯について歌う英語の歌を、歌い始めます。私の知らない、でも、優しくて単純な、静かだけれど力強い歌。いつの間にか、会場はその歌に包まれました。手拍子を取る人。歌う人。暗い会場に、温かな心が溢れました。

この張師の講演は、きっと、WCC 第十回釜山総会の思い出の「出来事」として、記憶されることだろうと思います。

キャンドルサービス。歩道を埋め尽くした参加者は、最後、手をつないで賛美をし祈って解散しました。

6. WCC釜山総会の先へ

WCC は、現代世界のキリスト教界の博覧会のようでした。そこには多くの発見がありました。そしてそこには、全教会の古くて新しい課題である「教会の一致」の問題が、露わになっていました。

WCC 総会内でも、「一致」を巡る議論は困難の中を進んだようです（資料集５～７ページを参照）。

また、前述した「核のない世界への一歩」と位置付けら

れた「朝鮮半島の平和と再統一を求める声明」を巡っても、政治的配慮による混乱と不一致があったことが報じられています（資料集７～８ページを参照）。

そして、WCC そのものに対しても、韓国内の教会に分裂と闘争が起こっていたようです。11 月 8 日付「NEWS AND JOY」紙は「WCC 宣教委員会長「宗教多元主義の疑惑は誤解」ミッションステートメント作成責任者に聞く：「WCC 反対者は、今回の声明しっかりと読んでほしい」」と題した記事を以て、WCC 側からの「反対者」への反論を掲載していました。

WCC に反対していたのは、所謂「保守派」や「福音派」と呼ばれる方々であると噂されています。しかし、11 月 4 日付「国民日報」紙は、「「我々 WEA は、WCC との協力関係にある」世界福音同盟が明らかに」とする記事を掲載し、所謂「福音派」の全教会を代表する立場から WCC を支持する記者会見の様子を報じました（資料集 11 ページを参照）。

この記者会見を行った世界福音同盟の代表者の方は、東北ヘルプのブースで、韓国の福音派の長老（若者のための全体会で講演者を務めた金牧師）と、会議を行って下さいました。そしてその会議の中で、川上宛、要請がなされました。WCC 反対運動を行っている人々の正体は何であるか、調べてほしいという要請でした。

帰国後、川上は、資料集 12 ページにあるとおり、メールを書いて送りました。その末尾、私は次のように記しました。

私たちは今、韓国の教会と世界の福音派の兄弟姉妹のために再び祈り始めるべき時にあるのだと思います。そして私は、世界福音同盟が立ち上がり、WCC 釜山総会が取り扱おうと試みた事柄を引き継ごう、と決意されていることを知り、大きな勇気を得ています。

神様の御業に参画するためには、連帯が必要です。ご存知の通り、この地球には多くの痛みがあります。放射能汚染は、その一つの例でしょう。今私たちは皆で叫び声を上げているのだと思います。たとえばその声は、「核から解放された世界へ脱出したい！出エジプトの出来事をもう一度！」という叫びかもしれません。

そして私は今思い出しています、「私の父はいつも御業に勤しんでいる。だから、私も働くのだ」というイエス様の声を！

釜山総会は終わりました。そして、世界は痛んだままに残されてます。「福島」の課題はこれからでしょう。津波被害地の孤立は、いよいよ厳しくなるでしょう。しかし、主は働かれます。私たちも、その業に加わりたい。その願いは、きっと、WCC の示した教会の破れをキリストの十字架と同期させ、その先に復活のイエスを幻視させるものと、私はそう信じています。この信仰の告白を以て、WCC 釜山総会の報告を終わります。

（2013 年 12 月 10 日　事務局長　川上直哉　記）

キャンドルサービスでは、木田牧師が「福島」の報告をされました。
通訳は、李貞妊・東北ヘルプ職員。

詩篇133篇の喜び

WCC 釜山大会で印象に残った場面を、との要請に従い、写真を探し、二つの場面を思い出す。両方共に、東北ヘルプとニュージーランド･クライストチャーチのクリスチャン･フォーラム（以下 NZ フォーラムと略）が合同で設置したブースでの出来事であった。思い出す間、繰り返しテゼの歌詩編 133 篇が聞こえる気がした。

ひとつは「核から解放された世界への運動」を求める WCC 声明案が難産の末に生み出された報告を皆でシェアしている場面である。北東アジア（日本･韓国･台湾）と南太平洋の人々、様々な立場の牧師・運動家・宣教師・WCC 職員等が、違いを乗り越えて集まり、一つになって世界の未来を担っていた。現場は、違いを乗り越える力を与える。フクシマの現場は深刻であるが、その深刻さの故にこそ、新しい可能性もそこに生まれる。

もうひとつは、世界教会の中心が動く現場の一コマである。世界福音同盟（WEA）の正式な派遣としてシューマッハー師が WCC 総会に出席していた。師はドイツ人である。シューマッハー師と、韓国福音派を代表する長老の金ミョンヒョク師が、東北ヘルプと NZ フォーラムのブースで会談した。金師は、若い頃「反 WCC」の急先鋒であったが、現場での出会いを通して、今では釜山大会全体会の講師も務めるほどの WCC 理解者となった――その主張を一切変えることなく、である。

世界教会の中心は、欧米（特にドイツを中心とする）からアジア・アフリカへ移動している。今や韓国は世界教会の「先進国」の勢いを示す。ローザンヌ運動などを通じ福音派は世界に向き合って久しい。WCC は WEA との協力関係を鮮明にした。しかし、韓国内で反 WCC 運動が「福音派」らしき人々から大規模に行われた。その意味は何か。その正体は何か。この謎を解くことが、会談の目的であった（その答えは、「CCK　WCC」と検索くだされば、日本語で読めます。）

ドイツ人と韓国人はしばしば「折り合いが悪い」らしい。そんな噂を真に受けてしまうような会談の開始だった。ブース主催者のチーム（イスラム教徒を含む）が固唾を飲んで見守り、筆者は仲介役を担った。幸いなことに、会談は笑顔で終わり、二人は旧知の仲のように睦まじく共に帰って行った（資料集 11 ページ下の写真を参照）。

世界は現場を巡って動いている。「リベラル･エキュメニカル･多元主義」といったレッテルは、現場の前では何の意味もない――そう学ぶことができた二つの場面であった。

声明文案策定の報告会

金ミョンヒョク師・シューマッハー師の会談

この文章は、全国のキリスト教書店で好評発売中の季刊誌『Ministry 20 号』に川上事務局長が寄稿したものです。

原発の課題と私たち

東北ヘルプ事務局長
川　上　直　哉

● はじめに

臨床宗教師、という新しい言葉がある。「チャプレン」と呼ばれてきた宗教者の働きを日本に根付かせようとする試みである。既に「教誨師（刑務所チャプレン）」「宗教主任（学校チャプレン）」といった言葉が使われて久しい。被災地にも、チャプレンが必要である。全ての痛む魂への配慮を行う人の役割を示す言葉を、カタカナ言葉ではなく、漢字を使って意味が通る言葉で。そうした願いを込めて、今、「臨床宗教師」という言葉が、被災地で使われ始めている。

筆者は魂の配慮を行うもの（牧会者）として、今、被曝地（特に「福島」）に関わっている。二度の原発爆発事故により、広範囲の被曝地が生まれた。「被爆」ではない。「被曝」である。原因不明とされる巨大な不安と健康障害の現場。それが「被曝地」である。無数の魂が痛んでいる。今こそ、臨床宗教師としての役割が、例えば牧師たちに、求められている。

「原発の課題」について書こうと思い、まず考える。私たちは、この巨大な課題を前に準備が足りていない。手持ちの言葉が不足している。だから今、最初の課題として、私たちは語り合い、言葉を創り出し磨き上げなければならない。願わくば、この小文が、その一歩となればと願う。

● 放射能禍について

「原発の課題」と言った時、まず、私たちは「放射能禍」を見つめなければならない。被曝地には、放射能の災禍が溢れている。その災禍を見つめると、放射能とは何かが、見えてくる。

筆者は現在、公益財団法人ウェスレー・ファウンデーション等の支援を受けて、「福島」県いわき市に住む子育て中の母親たち累計 30 名ほどに、ほぼ毎月定期的にお会いし、「短期保養」のための交通費支援を行っている。おひとりずつ 30 分程度の面談をさせて頂く。その中で、子どもたちの健康不安が募っていることを知らされる。鼻血が止まらない、アレルギー症状が激化した、口内炎が無数にできている、そして、甲状腺の異常が確認された、といった具合である。

NPO 法人「「福島」県の児童養護施設の子どもの健康を考える会」所属の看護師が、いつも、電話でこうした不安に対応してくださる。医療的に診れば、甲状腺異常以外のほとんどは、放射線による直接被害ではないだろう、と結論付けられる。それで、母親たちは少し、安心する。しかし、私は考える。今目の前にいる母親たちに憑り付くこの巨大な不安こそ、放射能の災禍ではないか。

そこで考える。「放射能」とは何か。それは“何か”を「放射」する「能力」である。何を、放射するのか。現場に立って理解することは、「放射能」とは「放射線」と「不安」を放射する能力である、ということである。被曝地は、この意味での「放射能」に直接曝される地域である。この災禍こそ、「放射能禍」である。

● 不安と分断と麻痺

放射能は、不安と放射線を放射する。不安と放射線は、その性質において、対照的である。
不安は、一挙に広範囲に拡散して被害をもたらす。そして程なく、その被害だけを残して消え去り、忘れられてしまう。対して、放射線は、一か所に照射し続けて被害をもたらす。その被害は、忘れたころに顕在化する。
放射線の害につて、筆者は詳しくない（それは今、専門家によって確認中であるという！）。しかし不安の害については、胸を痛めながら知らされている。家族が引き裂かれる。共同体が雲散霧消させられてゆく。生計を立てるべき生業が破壊される。そして、個々人の魂が深く毀損されて行く。

筆者は、月に六回程度、行政や自治会の現場責任者とお会いする「傾聴訪問」を行っている。そこで知らされるのは、「分断」と「麻痺」の現実である。不安は広範囲に広がる。不安とは、原因不明の恐怖である。原因が不明である以上、様々な対応がなされてしまう。そしてその対応それぞれは、自らの正当性を合理的に説明できない。結果、分断が生ずる。両親の間でも、子どもの将来を必死に考える者（多くは母親）と、今日明日の生計を立てることに専心する者（多くは父親）との間に、対話が困難な程の分断が生ずる。その分断の中で、母親・父親それぞれの魂が痛む。そして子どもの魂が、痛む。
魂を肉体と霊との総合と考えるなら、分断から所謂「健康被害」が生ずることも、不自然ではない。その際、感覚を麻痺させることで、応急対応を行うとしても、それもまた、不自然ではない。郡山駅や「福島」駅に、ガイガーカウンターを持って行ってはいけない。危険を知らせる警報音を鳴り響かせて、迷惑だから――こんな冗談のような現実が、今、日常化している。それは、不安に脅かされ分断に痛んだ結果の麻痺、である。

● 原発の課題と私たち

「東電」「廃炉」「再稼動」「特定秘密」「原発労働者」「周縁化」「差別」等、原発の課題は、無数に広がり、私たちは当惑する。しかし、その広がりの根元には、扇の要のような一点がある。それは、被曝地の放射能禍である。これを見れば混乱しない。これを見なければ、混乱する。課題が、あまりにも巨大だから。だから、原発の課題とはつまり、被曝地を見ることだと思う。
最後に「私たち」をキリスト者としてみる。キリスト者は、愛の福音を語る。愛は不安を取り除く。愛は和解をもたらして分断を覆う。そして愛は痛む者と共にいる神の告発の声を内に響かせて麻痺したものを正気に戻す。だから、「私たち」が臨床宗教師として被曝地に立つことの意味は、大きいと思う。

（この文章は２０１３年１２月２５日付『キリスト新聞』に掲載されました。）

ー教会直接支援の終了にあたってー

義捐金配分委員会　委員長　秋山善久

教会直接支援部門（ケリグマ）では、皆様から教会再建のために捧げられた献金を、その趣旨が十分に生かされるよう慎重に用いてまいりました。
支援の内容としては、会堂が破損するなど被害を受けた教会へのお見舞い、会堂の再建及び大規模修復のための支援、被害が甚大であった信徒家族への支援、原発被害を受けている教会の牧会支援、そして教会ネットワークによる活動支援などでした。これらの働きのため、これまで多くの教会と個人から尊い献金が寄せられましことを、心から厚く御礼申し上げます。
皆様からの献金により、教会再建の助けとなり、励ましを受け、牧会活動が前進したことでした。

この度、教会直接支援部門は2013年末をもって、献金の受け入れを終了させていただくことになりました。理由は、教会直接支援が緊急対応としての働きであって、当初の役割を果たしたと考えられることです。今までの皆様のお祈りと尊いご支援を心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

昨年、東北ヘルプはNPO法人として認可を受けました。被災地での支援のニーズは高く、今後も教会ネットワークの働きなど、特定の宗教に限らない支援活動を継続していく必要があります。そこで2013年末以降において教会直接支援に入金された場合においては、教会ネットワーク支援として用いさせていただきます。この働きのために覚えていただきますよう、お願い申し上げます。

これまでの主な活動

◆2011年
3月　緊急支援を全体会で決議
5月　義捐金委員会を組織
6月　被災区域の教会に、会堂被害に対しての義捐金申請の送付
　お見舞い金の給付（8月にて申請終了）
7月　大規模被災していると報告された会堂への委員による現地調査
8月　被災区域の教会に教会の人的被害に対する義捐金申請を送付
　給付（2012年1月にて申請終了）
◆2012年
1月　原発事故牧会支援の申請書を送付（700通）（2013年6月にて申請終了）
　大規模会堂修復の支援（2013.3申請終了）
2月　教会ネットワーク支援
　以後、上記の内容において委員会（32回）を開催し、義捐金を配分する。年月は省略。

緊急支援	見舞金	教会修復支援金	人的被害支援	原発事故牧会支援	活動支援
2 教会 1 宣教師	94 教会	16 教会	69 教会 197 世帯	31 教会	4 ネットワーク
400,000円	9,360,000円	17,442,070円	18,950,000円	3,100,000円	7,380,000円

被災した教会と修復（計画）例

郡山聖書バプテスト教会（震災直後→修復後）

会計報告

教会直接支援（ケリグマ）部門収支計算書（累計）

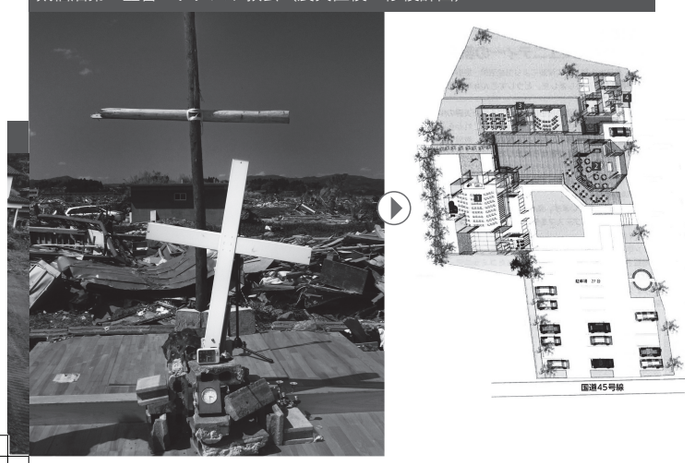
自　2011年 03月 18月
至　2013年 12月 31日

（単位：円）

		金　額
献金収入	(教会・個人)	83,642,312
その他収入	(普通預金利息)	33,373
収入計		83,675,685
職員給料	(スタッフ給与)	1,680,000
職員手当	(スタッフ住宅・通勤手当)	240,000
法定福利費	(スタッフ社会保険料)	371,958
報酬	(謝礼金・弁償金)	3,223,710
新聞図書費	(新聞・書籍)	1,200
通信運搬費	(電話・郵便・運賃)	219,866
賃借料	(レンタカー等)	420,000
支払手数料	(銀行手数料)	206,140
外注費	(ＨＰ・翻訳等)	461,094
消耗品費	(10万円未満の消耗品)	64,310
事務用品費	(10万円未満の文具等)	227,941
広告宣伝費	(チラシ等)	522,100
租税公課	(自動車税)	57,700
旅費交通費	(職員・関係者旅費)	2,334,246
燃料費	(ガソリン代)	194,698
地代家賃	(事務所家賃)	300,000
保険料	(車両保険)	74,550
会議費	(食事代・会場代等)	237,848
支援費	(見舞金・支援金等)	65,560,202
備品購入費	(ガイガーカウンター・ビジネスフォン)	111,300
出資金支出	(東北ディアコニア基本財産)	3,000,000
支出計		79,508,863
収支差額		4,166,822

※会堂再建支援予定　　シーサイドチャペル　3,000,000円

気仙沼第一聖書バプテスト教会（震災直後→修復計画）



仙台シーサイド教会（震災直後）

支援金・献金の受付口座

【郵便振替】
02290-8-136273
特定非営利活動法人　被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】
ゆうちょ銀行　二二九店　当座預金　0136273

Touhoku HELP

〒980-0012　宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6　エマオ 2F E
TEL./FAX. 022-263-0520
URL : http://tohokuhelp.com
MAIL : sendai@touhokuhelp.com